

# ファジィインターバル論理におけるシャノン展開

2L-8

菊池 浩明 向殿 政男  
 明治大学 理工学部

## 1. はじめに

我々の日常のあいまいな論理構造を取り扱う論理体系にファジィ論理がある。そこに、真偽のあいまいさだけでなく、未知や矛盾に関するあいまいさを導入した論理体系 = ファジィインターバル論理<sup>[1]</sup>が提案されている。ここでは、ファジィ論理で用いられていた[0, 1]上の数値の代わりに、区間[n, p]で真理値を取る。未知の度合はその閉区間の幅で、矛盾の度合は相当するファジィ集合の高さで表現される。「かつ」や「または」に相当する論理演算は、特殊な場合にファジィ論理を含む形で拡張されており、その代数系はドモルガン代数となることが知られている。また、それらの論理演算で構成される論理関数の数は有限であることも明らかにされている。

本稿では、ファジィインターバル論理における論理関数の表現について議論する。そのために、2値論理で言うところのシャノン展開をファジィインターバル論理に拡張する。

## 2. ファジィインターバル論理

区間真理値は次のように定義される集合Iの元である。

$$I = \{[n, p] \mid n, p \in [0, 1]\}$$

そして、そこに、2種類の半順序関係を定義する。

### [定義]

区間真理値  $x = [N_x, P_x], y = [N_y, P_y]$  について、

(真偽の半順序関係)  $x \supset y$  iff  $N_x \geq N_y, P_x \geq P_y$ .

(あいまいさの半順序関係)  $x > y$  iff  $N_x \geq N_y, P_y \geq P_x$ .

これらの順序関係の最大元、最小元となる区間真理値を次に示すシンボルで記す。

$$[1, 1] = 1, [0, 0] = 0, [0, 1] = U, [1, 0] = C$$

集合Iを、これらの半順序関係に基づいて、無限濃度のハッセ図(図1)で表現する。ここで、任意の区間真理値は図の上の1点として表されている。これから、任意の二つの区間真理値は、必ず真偽かあいまいさかのどちらかの半順序関係にあるということが明らかである。

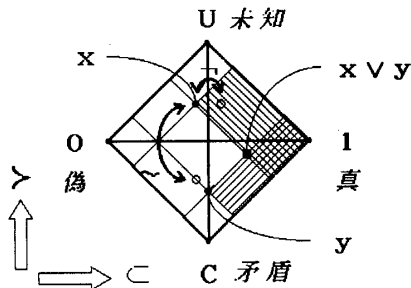


図1. 区間真理値のハッセ図

Shannon expansion in Fuzzy Interval Logic  
 Hiroaki Kikuchi, Masao Mukaidono  
 School of Science and Technology, Meiji University

## 3. 論理関数

真偽に関する半順序関係の上限、下限として論理和( $\vee$ ), 論理積( $\cdot$ )が、あいまいさの半順序関係からあいまい和( $\vee$ ), あいまい積( $\wedge$ )が、また、それぞれを互いに相補を持つように論理否定( $\neg$ ), あいまい否定( $\sim$ )が、それぞれ以下のように定義できる。(図1参照)

[定義]  $x = [n_x, p_x], y = [n_y, p_y]$  とする。

$$x \vee y = [\max(n_x, n_y), \max(p_x, p_y)]$$

$$x \cdot y = [\min(n_x, n_y), \min(p_x, p_y)]$$

$$x \vee y = [\min(n_x, n_y), \max(p_x, p_y)]$$

$$x \wedge y = [\max(n_x, n_y), \min(p_x, p_y)]$$

$$\neg x = [1 - p_x, 1 - n_x]$$

$$\sim x = [p_x, n_x]$$

ただし、明らかな場合には、 $x \cdot y$ を $xy$ で、 $\neg x$ を $\bar{x}$ で表す。

ファジィインターバル論理関数(以後、FI論理関数)とは、Iの元をとる変数 $x_i (i=1, \dots, n)$ と論理演算 $\vee, \wedge, \neg$ との有限回の結合により構成される論理式が表現する、 $I^n$ からIへの写像を行う関数である。

[例] 次の2変数のFI論理関数Fに対して、

$$F(x, y) = xy \vee x\bar{y}$$

$I^2$ の元  $X = ([0.2, 0.6], [0.5, 1])$  を入力する。

$$F(X) = [0.2, 0.6][0.5, 1] \vee [0.6, 0.8][0.2, 0.6][1, 0.5]$$

$$= [0.2, 0.6] \vee [0.2, 0.5]$$

$$= [0.2, 0.6]$$

ファジィ論理と同様に以下の等式が成立する。

べき等律  $x \vee x = x, x \cdot x = x$  /  $x \vee \bar{x} = 1, x \wedge x = x$

交換律  $x \vee y = y \vee x, x \cdot y = y \cdot x$  /  $x \vee y = y \vee x, x \wedge y = y \wedge x$

結合律  $(x \vee y) \vee z = x \vee (y \vee z)$  /  $(x \vee y) \vee z = x \vee (y \vee z)$

吸収律  $x \vee xy = x, x(x \vee y) = x$  /  $x \vee x \wedge y = x, x \wedge (x \vee y) = x$

分配律  $(x \vee y)z = xy \vee yz$  /  $(x \vee y) \wedge z = x \wedge z \vee y \wedge z$

復帰律  $\neg \neg x = x$  /  $\sim \sim x = x$

最大元  $x \vee 1 = 1, x \cdot 1 = x$  /  $x \vee U = U, x \wedge U = x$

最小元  $x \vee 0 = x, x \cdot 0 = 0$  /  $x \vee C = x, x \wedge C = C$

ドモルガン律  $\neg(x \vee y) = \neg x \cdot \neg y$  /  $\sim(x \vee y) = \sim x \wedge \sim y$

しかし、ファジィ論理では成立するクリーネ律はここでは一般でない。成立するための必要十分条件を次に示す。

### [定理1]<sup>[1]</sup>

$x, y$ をIの元とする。クリーネ律、

$$(x \vee \neg x) \vee (y \neg y) = x \vee \neg x, (x \vee \neg x)(y \neg y) = y \neg y$$

が成立するのは、

$$x \supset y \text{ または } y \supset x \text{ (真偽の半順序関係にある)}$$

なるとき及びその時に限る。

(証明略)

ファジィ論理関数の加法標準型は、クリーネ律を適用して相補最小項(全ての変数が現れるような相補項)へ展開することで一意に定まっていた。しかし、定理1が示す様に、FI論理関数においては相補最小項に展開することは許されない。これは、FI論理関数の標準型が、加法形式に展開した後、吸収律を適用するだけで一意に定まることを意味している。

[例] 次の2変数の論理関数FとGはファジィ論理においては同値である。(括弧内にクリーネ律で展開する)

$$F(x, y) = xy \vee x\bar{y}$$

$$G(x, y) = xy \vee x\bar{x} = xy \vee x\bar{x}(y \vee \bar{y}) = xy \vee \bar{x}xy \vee \bar{x}x\bar{y} = F(x, y)$$

しかし、ファジィインターバル論理においては、これらは異なった論理関数である。例えば  $(x, y) = (U, C)$  を入力すると、

$$F(U, C) = UC \vee UUC = 0 \vee 0 = 0$$

$$G(U, C) = UC \vee UU = U \neq F(U, C)$$

論理演算  $(\vee, \cdot, \neg)$  とあいまい演算  $(\vee, \wedge, \neg)$  との間に、次の関係がある。

**【補題1】(分配性)**

任意の区間真値  $x, y, z$  について、

$$(x \vee y) \vee z = (x \vee z) \vee (y \vee z) \quad (xy) \vee z = (x \vee z)(y \vee z)$$

$$(x \vee y) \vee z = (x \vee z) \vee (y \vee z) \quad (x \wedge y) \vee z = (x \vee z) \wedge (y \vee z)$$

**【補題2】(否定に関する分配性)**

$$\neg(x \vee y) = (\neg x) \vee (\neg y) \quad \neg(x \wedge y) = (\neg x) \wedge (\neg y)$$

$$\sim(x \vee y) = (\sim x) \vee (\sim y) \quad \sim(xy) = (\sim x)(\sim y)$$

**【補題3】(否定の交換性)**

$$\neg \sim x = \sim \neg x$$

F I 論理関数の重要な性質の一つに次の単調性がある。

**【定理2】(あいまいさの単調性) <sup>[1]</sup>**

F を F I 論理関数とする。任意の  $a, b \in I^n$  について、

$$a > b \Rightarrow F(a) > F(b) \quad (\text{証明略})$$

**【系2】**  $n$ 次元ベクトル  $a_1 = (1, x_2, \dots, x_n), a_0 = (0, x_2, \dots, x_n), a$   
 $u = (U, x_2, \dots, x_n), ac = (C, x_2, \dots, x_n)$  について、

$$au > a_1 > ac, \quad au > a_0 > ac$$

なので、定理2より、F I 論理関数Fについて次が明らか。

$$F(a_1) \vee F(au) = F(au) \quad F(a_0) \vee F(au) = F(au)$$

$$F(a_1) \vee F(ac) = F(a_1) \quad F(a_0) \vee F(ac) = F(a_0)$$

$$F(a_1) \vee F(a_0) = F(au) \quad F(ac) \vee F(au) = F(au)$$

F I 論理関数が等しくなるための必要十分条件を示す。

**【定理3】<sup>[2]</sup>**

F I 論理関数G, Hが、全ての  $x \in I^n$  について、

$$G(x) = H(x)$$

となるのは、任意の  $a \in I^4 = \{0, 1, U, C\}^n$  について

$$G(a) = H(a)$$

が成立する時、及びその時に限る。 (証明略)

この定理は、F I 論理関数が本質的に4値であることを意味しており、このことから次のシャノン展開が導かれる。

**4. シャノン展開**

シャノン展開は、2値論理において任意の論理関数を一意的に表現するのに有効な定理である。これを次のように拡張する。

**【定理4】**

任意のF I 論理関数  $F(x) = F(x_1, \dots, x_n)$  は、次式で展開できる。

$$f(x) = xF(1, Y) \vee \bar{x}F(0, Y) \vee x\bar{x}\{F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \vee \{F(U, Y)F(C, Y)\}$$

但し、ここで  $F(x, Y)$  は  $F(x_1, \dots, x_n)$  を表現している。

(証明)  $x$  について次の4つの場合に分けて証明する。

(1)  $x=1$  の時、 $f(x) = F(1, Y) \vee F(U, Y)F(C, Y)$

ここで、 $F(1, Y)$  とあいまい和をとる。

$$\begin{aligned} f(x) \vee F(1, Y) &= \{F(1, Y) \vee F(U, Y)F(C, Y)\} \vee F(1, Y) \\ &= F(1, Y) \vee F(1, Y) \vee F(U, Y)F(C, Y) \quad ; \text{補題 (分配性)} \\ &= F(1, Y) \vee F(1, Y) \vee (F(U, Y) \vee F(1, Y))F(C, Y) \vee F(1, Y) \\ &= F(1, Y) \vee F(U, Y)F(1, Y) \quad ; \text{系2} \\ &= F(1, Y) \quad ; \text{吸収律} \end{aligned}$$

よって、半順序であるので、 $F(1, Y) > f(x)$  ①

逆に、 $F(1, Y)$  とあいまい積を取って、

$$\begin{aligned} f(x) \wedge F(1, Y) &= \{F(1, Y) \vee F(U, Y)F(C, Y)\} \wedge F(1, Y) \\ &= F(1, Y) \vee (F(U, Y) \wedge F(1, Y))F(C, Y) \wedge F(1, Y) \\ &= F(1, Y) \vee F(1, Y)F(C, Y) \\ &= F(1, Y) \end{aligned}$$

よって、 $f(x) > F(1, Y)$  ②

①, ② と半順序関係の非対称律より、 $f(x) = F(1, Y)$ 。

(2)  $x=0$  の時も、(1)と同様にして、 $f(x) = F(0, Y)$ 。

(3)  $x=U$  の時、

$$\begin{aligned} f(x) &= UF(1, Y) \vee UF(0, Y) \vee U\{F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \\ &= UF(1, Y) \vee UF(0, Y) \vee U\{F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \\ &= U\{F(1, Y) \vee F(0, Y) \vee F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \vee U\{F(U, Y)F(C, Y)\} \\ &= U\{F(1, Y) \vee F(0, Y) \vee F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \vee U\{F(U, Y)F(C, Y)\} \\ &= U\{F(U, Y)\} \vee \{F(1, Y) \vee F(0, Y) \vee F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \\ &= U\{F(U, Y)\} \vee \{F(U, Y) \vee F(U, Y)\}F(C, Y) \vee F(U, Y) \\ &= U\{F(U, Y)\} \vee F(U, Y)F(C, Y) \\ &= UF(U, Y) \vee F(U, Y) \\ &= F(U, Y) \end{aligned}$$

よって、 $F(U, Y) > f(x)$  ③

$$\begin{aligned} f(x) \wedge F(U, Y) &= U\{F(U, Y)\} \vee \{F(1, Y) \vee F(0, Y) \vee F(U, Y) \vee F(C, Y)\} \\ &= U\{F(U, Y)\} \vee \{F(U, Y) \wedge F(U, Y)\}F(C, Y) \wedge F(U, Y) \\ &= F(U, Y) \vee \{F(1, Y) \vee \dots \vee F(U, Y)\} \vee F(U, Y)F(C, Y) \\ &= F(U, Y) \vee F(U, Y)F(C, Y) \\ &= F(U, Y) \end{aligned}$$

よって、 $f(x) > F(U, Y)$  ④

③, ④より、 $f(x) = F(U, Y)$

(4)  $x=C$  の時も、同様に、 $f(x) = F(C, Y)$

以上、(1), (2), (3), (4)より、常に、 $f(x) = F(x)$  (証明終)

【例】次の2変数のF I 論理関数に対して、

$$F(x, y) = xy \vee \bar{x}y \vee \bar{x}\bar{y}$$

変数  $x$  についてシャノン展開する。

$$\begin{aligned} f(x, y) &= x(y \vee \bar{y}) \vee \bar{x}(y \vee \bar{y}) \vee \bar{x}\bar{y} \{ (Uy \vee U\bar{y} \vee y\bar{y}) \\ &= x(y \vee \bar{y}) \vee \bar{x}(y \vee \bar{y}) \vee \bar{x}\bar{y} \{ (Uy \vee U\bar{y} \vee y\bar{y}) \\ &= xy \vee x\bar{y} \vee \bar{x}y \vee \bar{x}\bar{y} \{ (U \vee C)y \vee (U \vee C)\bar{y} \vee y\bar{y} \} \\ &= xy \vee x\bar{y} \vee \bar{x}y \vee \bar{x}\bar{y} \{ (U \vee C)y \vee (U \vee C)\bar{y} \vee y\bar{y} \} \\ &= xy \vee x\bar{y} \vee \bar{x}y \vee \bar{x}\bar{y} \{ (U \vee C)y \vee (U \vee C)\bar{y} \vee y\bar{y} \} \\ &= xy \vee \bar{x}y \vee \bar{x}\bar{y} = F(x, y) \end{aligned}$$

**5. おわりに**

ファジィインターバル論理におけるシャノン展開を示した。この定理より、系として任意の4値からなる真値表からF I 論理関数を表現する方法を導くことができるだろう。そして、それは知識獲得等の分野に有効でないかと我々は考える。本論文で扱った論理式の定義には、I の元の定数は含まれていない。この定数を含むことや、他の論理演算を認めることが、F I 論理の性質にどのように依存するかは興味深いテーマである。

**参考文献**

[1] 菊池, 向殿: ファジィインターバル論理の提案, 第4回ファジィシステムシンポジウム講演論文集, pp. 215-220 (1988)  
 [2] 菊池, 向殿: ファジィインターバル論理関数について, 第5回ファジィシステムシンポジウム講演論文集, pp. (1989)  
 [3] 高木, 向殿: 正則多値関数について, 多値論理及びその応用 (IV), 京都大学数理解析研究所講究録, 687 (1989)  
 [4] 向殿: ファジィ論理における2, 3の性質について, 信学論 (D), 58-D, 3 (昭和50-03)